

第64回つなごう命の会学習会

牧志駅前ほしぞら公民館・2024/9/21

知られざる核戦争
凄まじい情報操作

特に内部被曝の隠蔽

知られざる核戦争（情報戦略） 被爆国日本は米核戦略を支えている ⇒援護法から内部被曝排除

- (1) 被爆者医療法/被爆者援護法 から
内部被曝が排除された
- (2) 被災者は内部被曝に苛まれた⇔精神疾患だ！
- (3) 政府は「外部被曝だけ」に拘る
- (4) 人権と科学無視⇒救済/差別体系
 - ①被爆者
 - ②第一種健康診断特例区
 - ③第二種健康診断特例区（長崎被爆体験者）

1945/9/10 原子爆弾の放射能が 残っていないと証明するように

グローブス准将（マンハッタン計画指揮者）により広島長崎に派遣されたマンハッタンのウォーレン医師調査団の一員コリンズはこう語っている：「自分たちはグローブス准将の首席補佐官ファーレルから、『原子爆弾の放射能が残っていないと証明するよう』言いつかっていた。多分調査団は被爆地に行く必要さえ無かった。というのも一行が日本派遣の指令を待っていた頃「スターズアンドストライプス(星条旗新聞)」に我々の調査結果が載ったよ」

E.Welsome: プルトニウムファイル (p 119)

知られざる核戦争と原爆被害者

- ① 米核戦略 核兵器支配戦略⇒世論操作を重視
放射線被曝被害は「無い」

化学兵器、生物兵器と同じでは無いと虚偽宣伝

初期被曝（外部被曝）は隠しようが無い

⇔ 内部被曝は徹底隠蔽

「爆心地周辺には放射能降下物は無い」

- ① 科学的隠蔽 Oppenheimer 砂漠モデル

Glasstone 原子雲衝撃波反射波モデル

DS86 台風後の測定を「投下直後の値」とする

- ② 政治的隠蔽（「放射能は残留しない」）

⇒被曝者医療法・被爆者援護法

知られざる核戦争と原爆被害者

国の科学的・合理的根拠とするもの

砂漠モデル、Glasstone、
基本型、DS86、黒い雨に関する専門家会議
全てに於いて現実の内部被曝被災者が
否定されてきた

②被爆者医療法・援護法に

「知られざる核戦争」が直接作用
⇒被爆者の定義から「内部被曝」排除
(直接被曝者・入市被曝者)
⇒被爆者支援制度に差別

被爆者 ⇔ 健康診断受診者 第1種 ⇔ 2種 長崎被爆体験者

被爆者（被爆者健康手帳の交付を受けている者）は次のいずれかに該当する者です。

- ① 1号被爆者（直接被爆者）原爆投下の際、当時の広島市もしくは長崎市の区域内又は政令で定めるこれらに隣接する区域内に在った者。 内部被曝排除
- ② 2号被爆者（入市者）原爆投下から2週間以内（広島・S20.8.20まで、長崎・S20.8.23まで）に爆心地から2km以内に入った者。 内部被曝排除
- ③ 3号被爆者 原爆投下の際又はその後において、身体に原子爆弾の放射能の影響を受けるような事情の下にあった者。
 - 1、近隣の地域で救援や治療・看護にあたった者
 - 2、黒い雨地域に在った者のうち、健康管理手当が受けられる病気にかかった者
 - 3、海面の反射等で特に影響の強かった地域に在った者
- ④ 4号被爆者（胎児）上記被爆者から
広島では、1946年5月31日まで、
長崎では1946年6月3日までに生まれた者。

長崎被爆体験者への三重の差別 残念ながら**法廷闘争は「被爆者手帳」のみ**

(1) **被爆者援護法は内部被曝（放射性降下物被曝）を排除**

1号（地域指定：直接被爆者）、2号（入市被爆者）

援護の差別体系①被爆者②第1種健康診断③第2種健康診断

国は内部被曝を排除し続ける ⇔ **市民は内部被曝で健康被害を**
⇒被爆者支援の施策が差別的にならざるを得なかった

(2) （被爆体験者の意味）あなたたちは被曝していません

あなたたちは被曝したと精神的に思っているだけです

(3) （健康被害の位置づけ）

健康被害は**精神的ストレス（精神疾患）**によります

医療手当には**精神神経科/心療内科の通院証明が必用**

完璧に国家が被爆被害者に行っている**偏見/差別**です

⇒ **「精神疾患に関わりなく」内部被曝被害**

国は偏見差別を謝罪し直ちに被爆者と認定すべき

広島『黒い雨』 高裁判決の意義

法律的には確定されていた原子爆弾が投下された際又はその後において身体に原子爆弾の放射能の影響を受けるような事情（3号被爆者条件）
どう判定したか

(1) 第一審:内部被曝はどうでも良い:

法定の11疾病に罹っていれば「被爆者」だ
従来の内部被曝否定の差別制度の枠組み内の判決

法的にも科学的にも「従来と変化無し」

(2) 第二審：①内部被曝を完璧に認める

②放射能環境がもたらされた機序も認める

科学的/合理的根拠に対して『科学的誠実』な判断

(3) 国の対応：内部被曝を認めるわけにはいかない、
第一審基準だ！
三権分立の原則違反

広島『黒い雨』 高裁判決

原爆の放射能により健康被害が生ずることを否定することができるか否かという観点から、科学的知見を用いるべきであり、例えば、**それまで原爆の放射能により健康被害が生ずることを否定することができると考えられていたけれども、最新の科学的知見により、その結論に疑義が生じたというのであれば、被爆者援護法1条3号の「身体に原子爆弾の放射能の影響を受けるような事情の下にあった者」に該当するという結論を導く方向で用いるべきである。**

重要視点（科学と人権）

被爆者援護法で如何に科学的知見を位置づけるか？

水平に広がる原子雲の存在⇒健康被害が生じることを否定する論への十分な疑義⇔積極的被曝環境⇒被爆体験者は被爆者

広島高裁判決

- 黒い雨の降る空間には放射性微粒子が充満するため、雨に打たれても打たれなくとも呼吸による内部被曝がもたらされる。
- また、黒い雨は大地に生育される野菜などの表面に付着して農作物を汚染し、さらに、黒い雨が土壌を汚染し、放射性微粒子が根から吸収され農作物を汚染する。これら農作物を食べることで、内部被曝をもたらす。加えて、黒い雨が流れ込んだ池や川の水に接すると水が媒体となって内部被曝をもたらす。つまり、水に浸けた物には放射性微粒子が付着し、水を飲むと内部被曝する

矢ヶ崎克馬意見書

- 黒い雨が降った環境に居た者は放射能の影響を避けることは出来ない。黒い雨に打たれる（雨に濡れる）と皮膚や衣服に放射性微粒子が付着し身体に密着あるいは近接した場所から継続的に被ばくを与える（付着被曝）。黒い雨の混じった水を飲むと内部被曝がもたらされる。勿論、黒い雨の降雨中の空気には放射性微粒子が含まれており、呼吸による内部被曝がもたらされる。黒い雨は土壌を汚染し、葉などの表面に付着し農作物を汚染する。土壌汚染は根から吸収され農作物を汚染する。放射能物質は作物に移行する。黒い雨に打たれた者も打たれなかった者も、黒い雨が降った環境に居た者は、放射能の影響を免れないのである。そのため、黒い雨降雨地域では、被曝後、脱毛、がんをはじめ各種の健康被害が多発することになった。

長崎被爆体験者地裁判決

2024年9月9日

部分勝訴しかし不当判決

法律が間違っていれば、

その被害/差別/偏見は凄まじい

法律が間違っていれば、 その被害/差別/偏見は凄まじい

- (1) 被爆者援護法（被爆者医療法）から
内部被曝は排除された
- (2) 数々の差別制度 + 「**精神疾患**」 強制偏見
- (3) 黒い雨広島高裁は
完全に「内部被曝」を認めた
- (4) 長崎地裁判決は逆戻り
「ケチ付ける口実」 探しの**証拠否定**

水平に広がる円形原子雲、マンハッタン調査
部分勝訴。不当判決

ニャロメ！不当判決！新たな分断差別



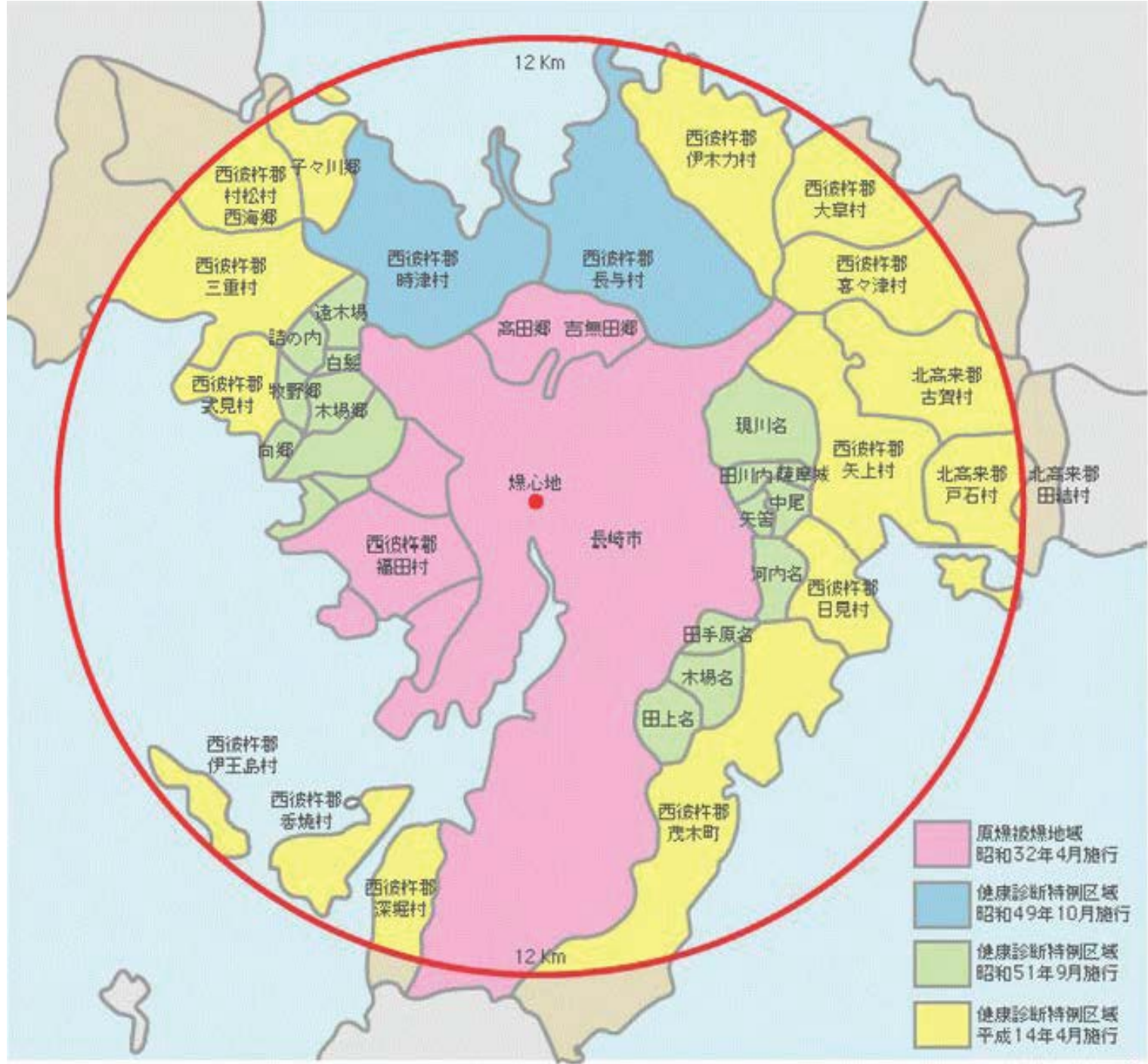
長崎 被爆地域

原爆 被爆地域

第一種 健康診断談 区域 (S49)

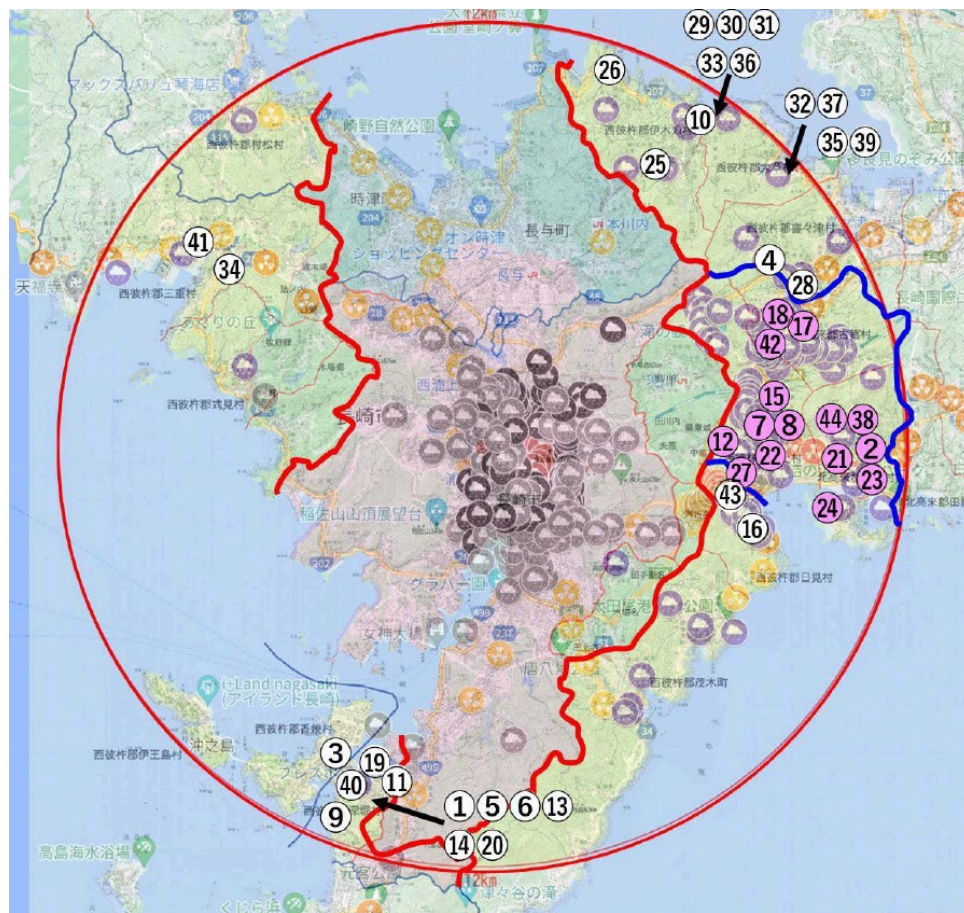
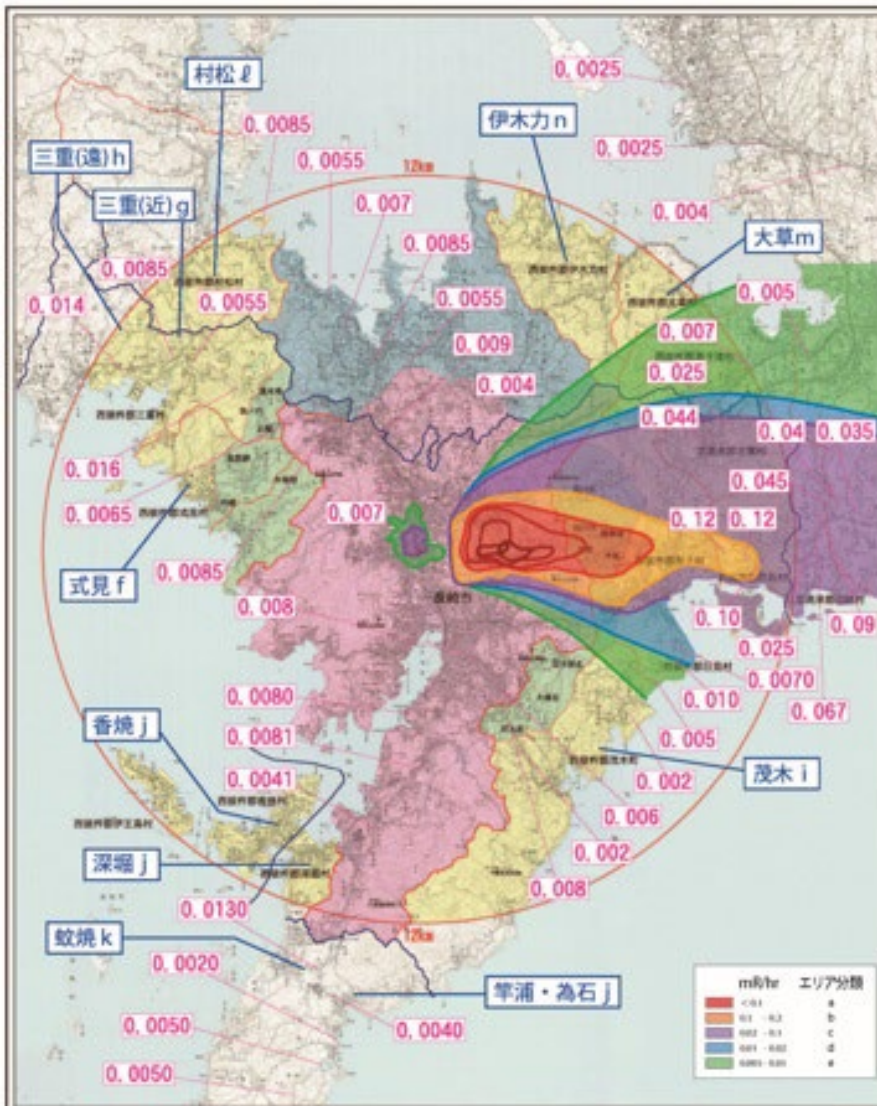
第一種
健康診断談
区域（S51）

第二種（被爆体験者）
区域



※ 原爆投下時の地名

「原爆手帳交付」認定者15名／原告44 放射線量高く黒い雨確認地域のみ




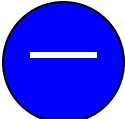
.....→ 時間→

火球温度

数百万度

数千度

プラズマ状態

バラバラ { 原子核  +
電子  -

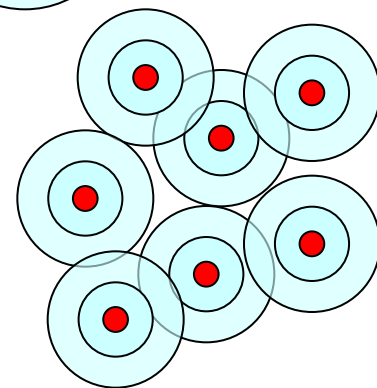
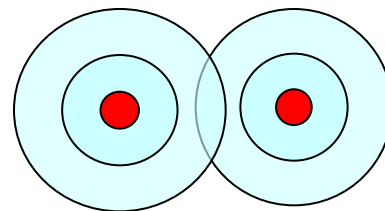
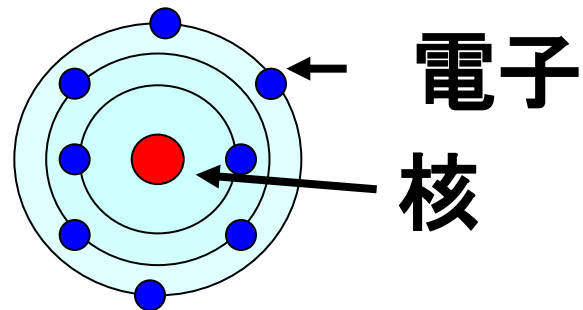
原子に



分子に



微粒子に



火球の中の分子形成

「内部被曝は無い」 科学的根拠

オッペンハイマー

砂漠モデル

水分の無いところでの放射線微粒子

①微粒子の振る舞い「ストークスの法則」

②アラモゴート砂漠の乾燥空気中での爆発
トリニティー実験 1945年7月16日

オッペンハイマーの「地元に放射能は無い」

ストークスの法則（微粒子の落下） $\sim 1\text{mm/s}$

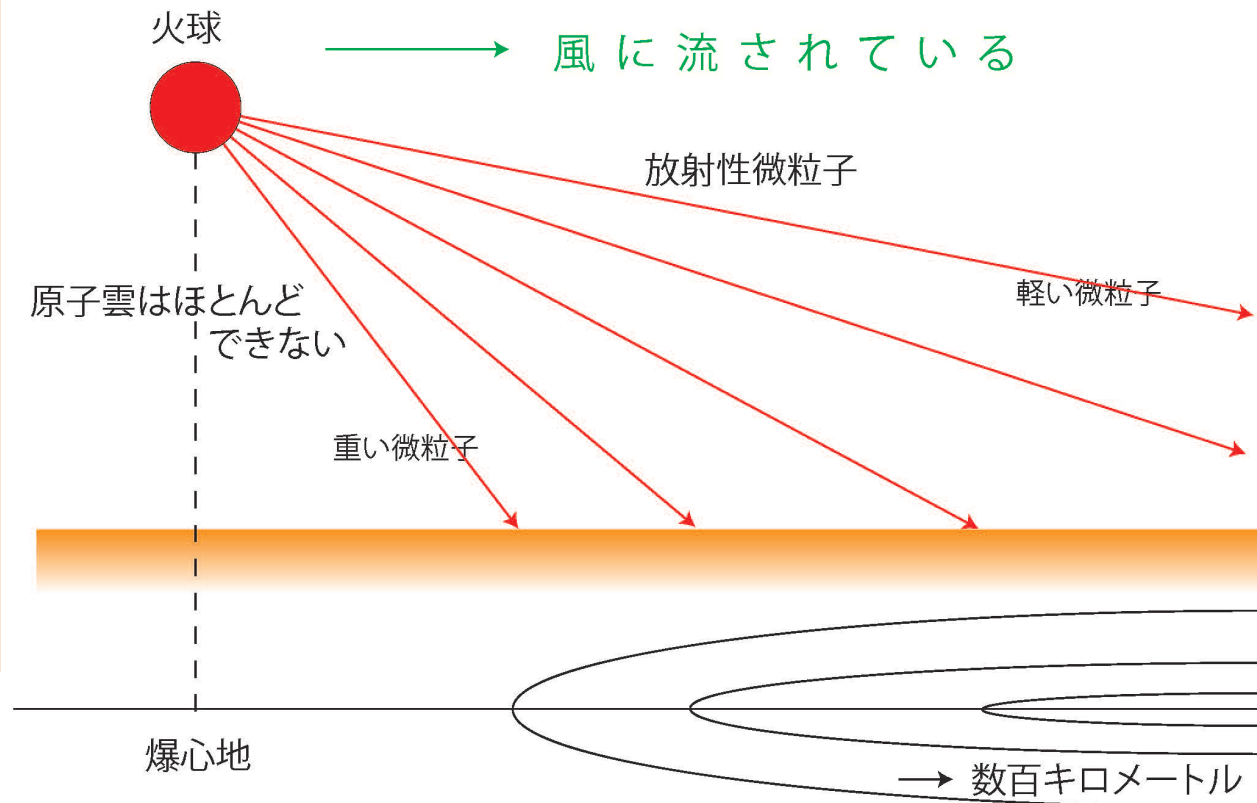
自然風（ 1m/s ）で横に流される間に 1mm 落下する

砂漠モデル ① 600m の上空爆発 \Rightarrow 爆心地は放射能ゼロ
②放射能は上昇してジェット気流に乗り全世界へ

砂漠 モデル

爆心地に
は放射能
は無い

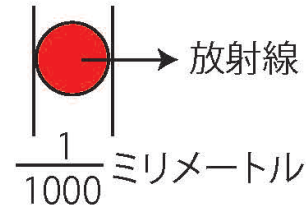
砂漠（湿度 \sim ゼロ）の場合



砂漠と
高湿度中
の違い

砂漠

放射線微粒子



質量(重さ)

$\sim \frac{1}{10\text{億}} \text{ g}$

落下速度

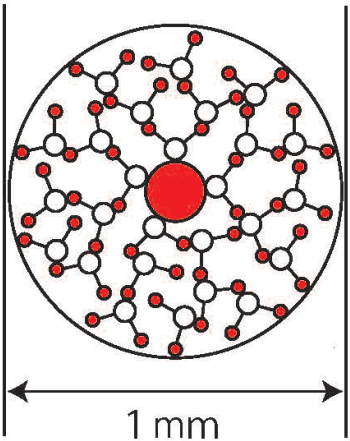
$\sim 1\text{mm}/\text{秒}$

風



高湿度中

雨 滴

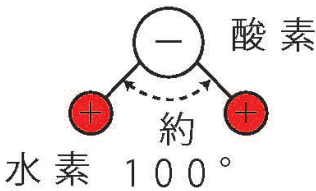


$\sim 1 \text{ g}$

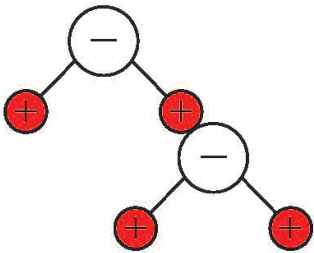
$\sim \text{数m}/\text{秒}$



水 分 子 は



⊕ と ⊖ が引き合う

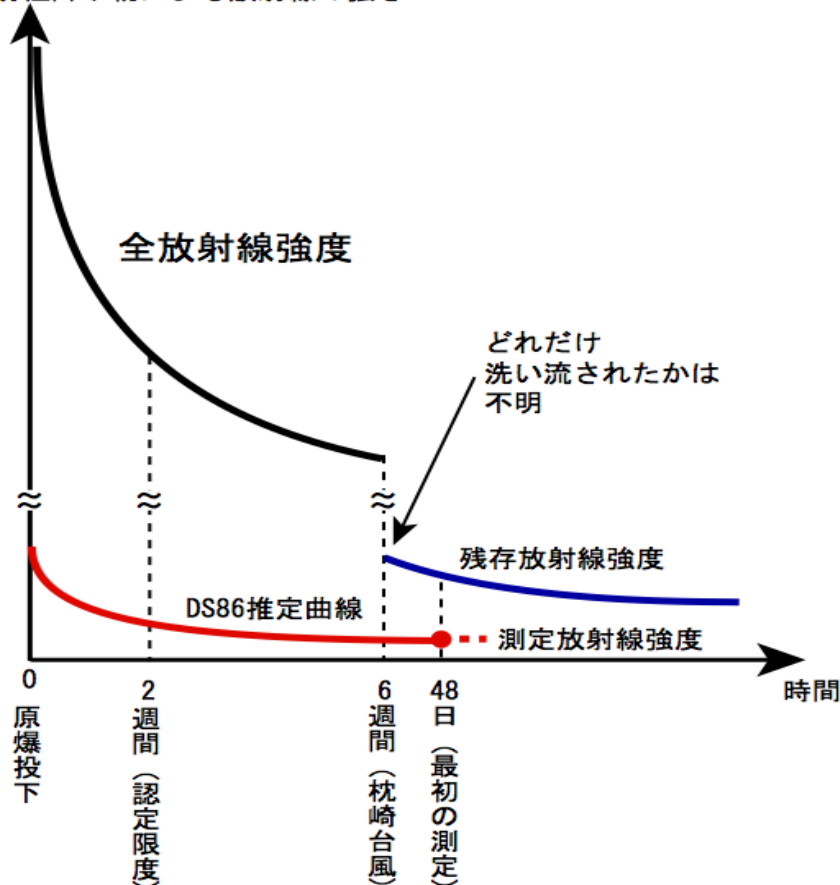


内部被曝の隠ぺい（放射能測定）

原爆線量再評価・DS86 ⇔ 被爆者医療法の
内部被曝否定の後追いの証明

枕崎台風後に測定させ、
「これがはじめからの量である」

放射性降下物による放射線の強さ



枕崎台風

長崎：1200mm降雨

広島：900mm降雨

- (1) デルタ入り口堤防決壊
- (2) 床上1m濁流
- (3) 太田川の橋 20本流失

放射性微粒子

直径 $1\mu\text{m}$ 程度（ $1\mu\text{m}$ は 1mm の1000分の1）
の中におよそ1000万個の原子

その中の大方は放射能を有す
微粒子から猛烈な放射線が出る

微粒子は強く **+電荷** を持つ（ β 線発射が主）
 \Rightarrow 強く水分子を集中させる（凝縮させる） \Rightarrow 雨

砂漠では水と合体せず放射性微粒子だけで存在

高湿度中の原爆爆発

(1) 低空（高々4km）に広がる原子雲の存在

原子雲の形成/上昇は高温による浮力

逆転層で上昇できなくなる部分

⇒水平に、円形に押し出される

(2) 猛烈な放射能による結露・雨滴化

Cs137のほぼ1000万倍の放射能

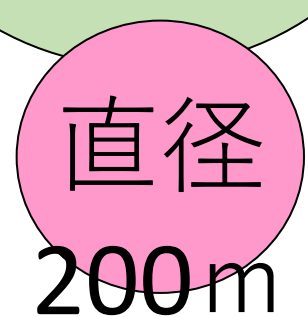
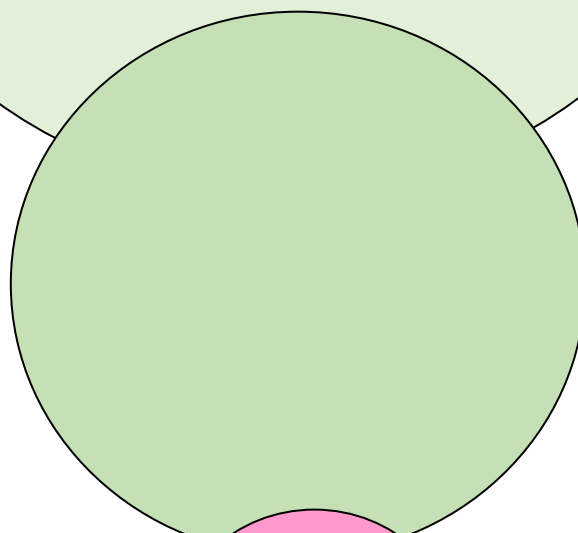
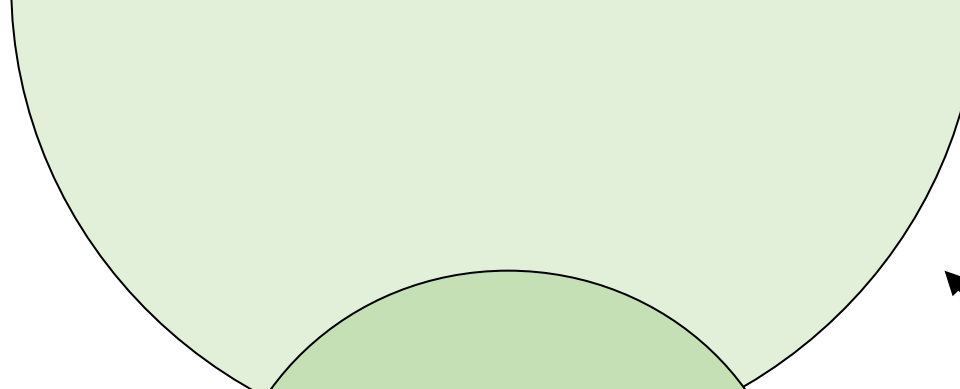
電離による電荷の生成⇒水分子の凝集

雲の生成・黒い雨の降雨

(3) 雲の厚さや高さに依存しない降雨

長崎は広島より温度が高く湿度が少なかった

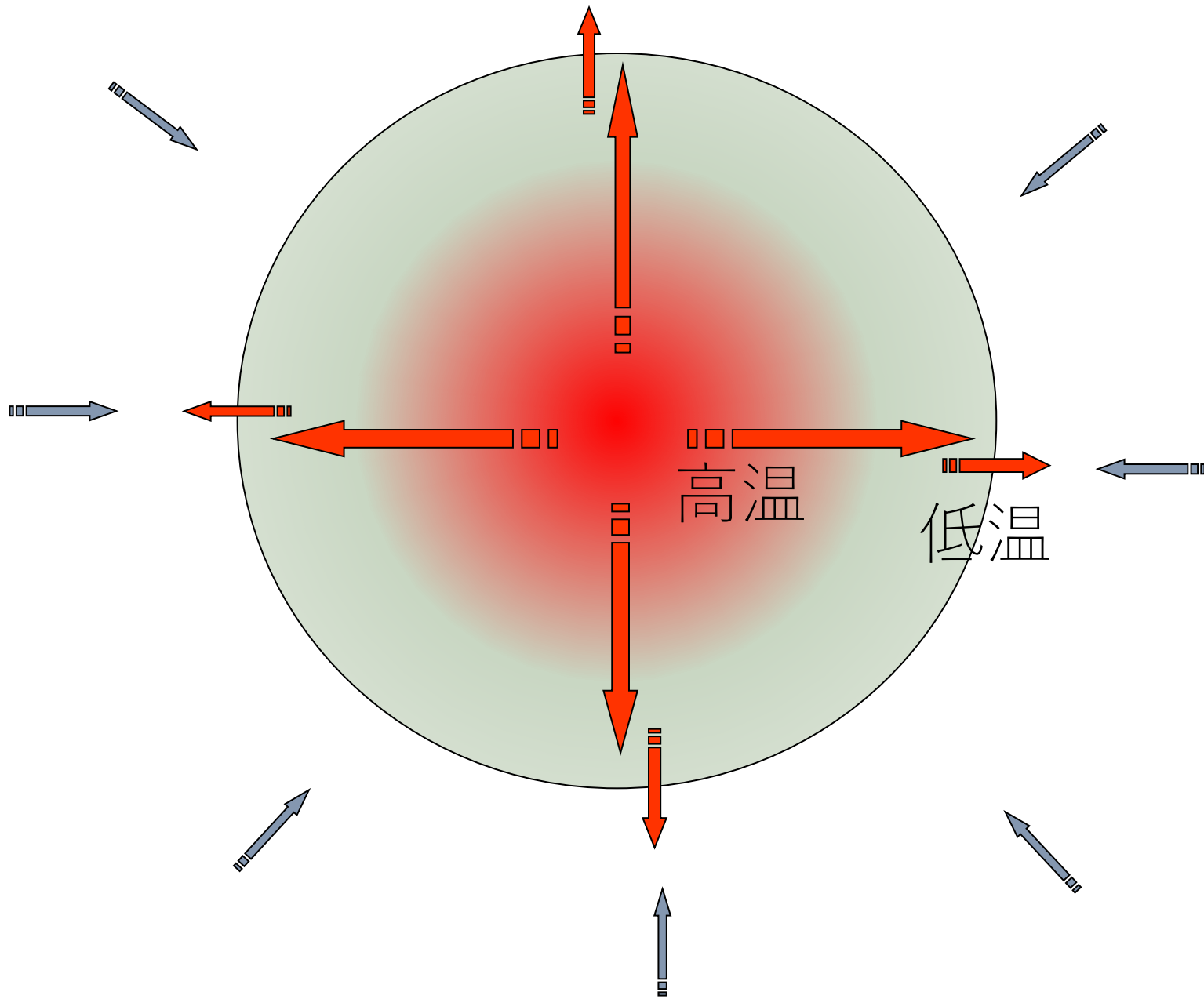
⇒黒い雨降雨域が狭かった



火球

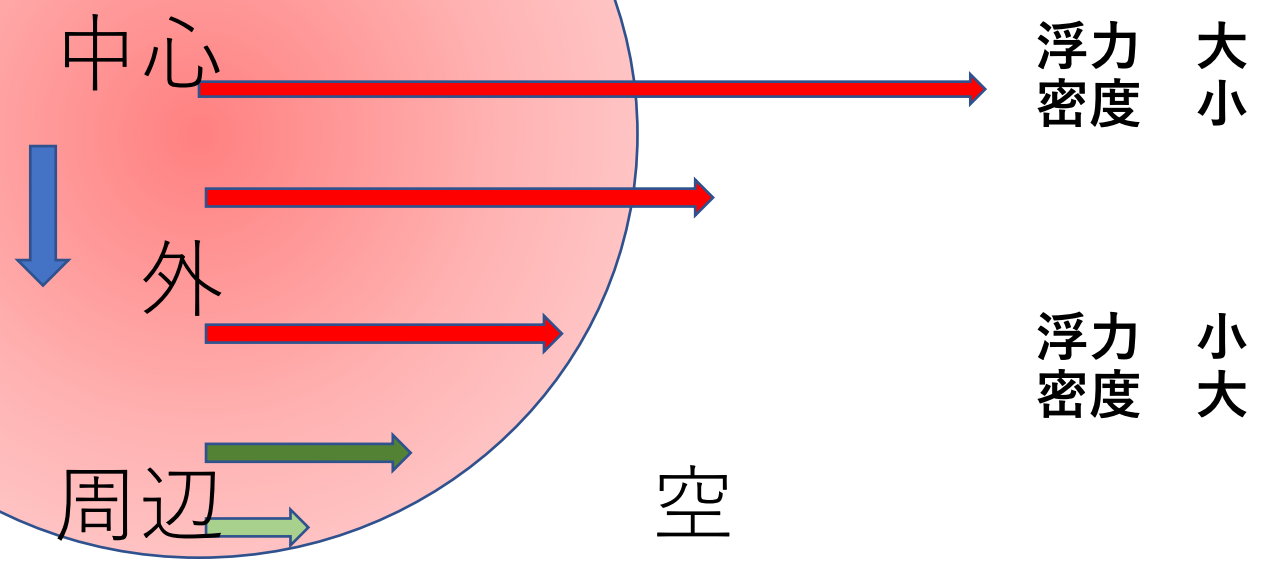
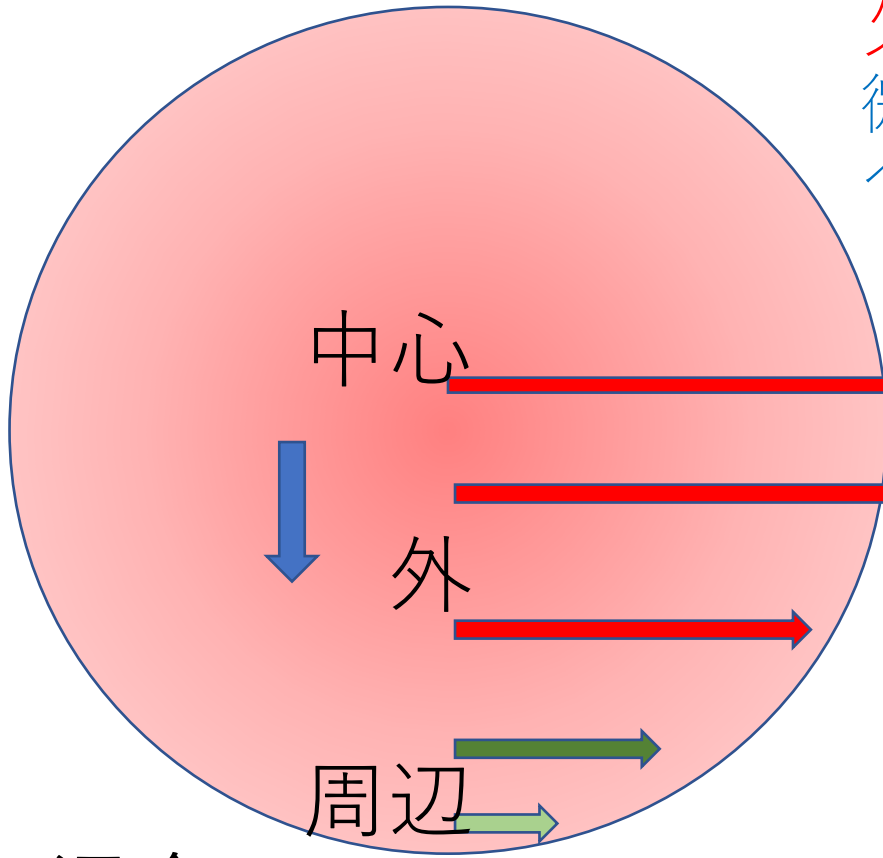
地上

火球の上昇



分子速度と温度

火球 中心ほど温度高い
微粒子速度・大きい⇒外へ外へ



浮力 大小
密度 大小
浮力 小大
密度 小大
浮力なし
上昇せず

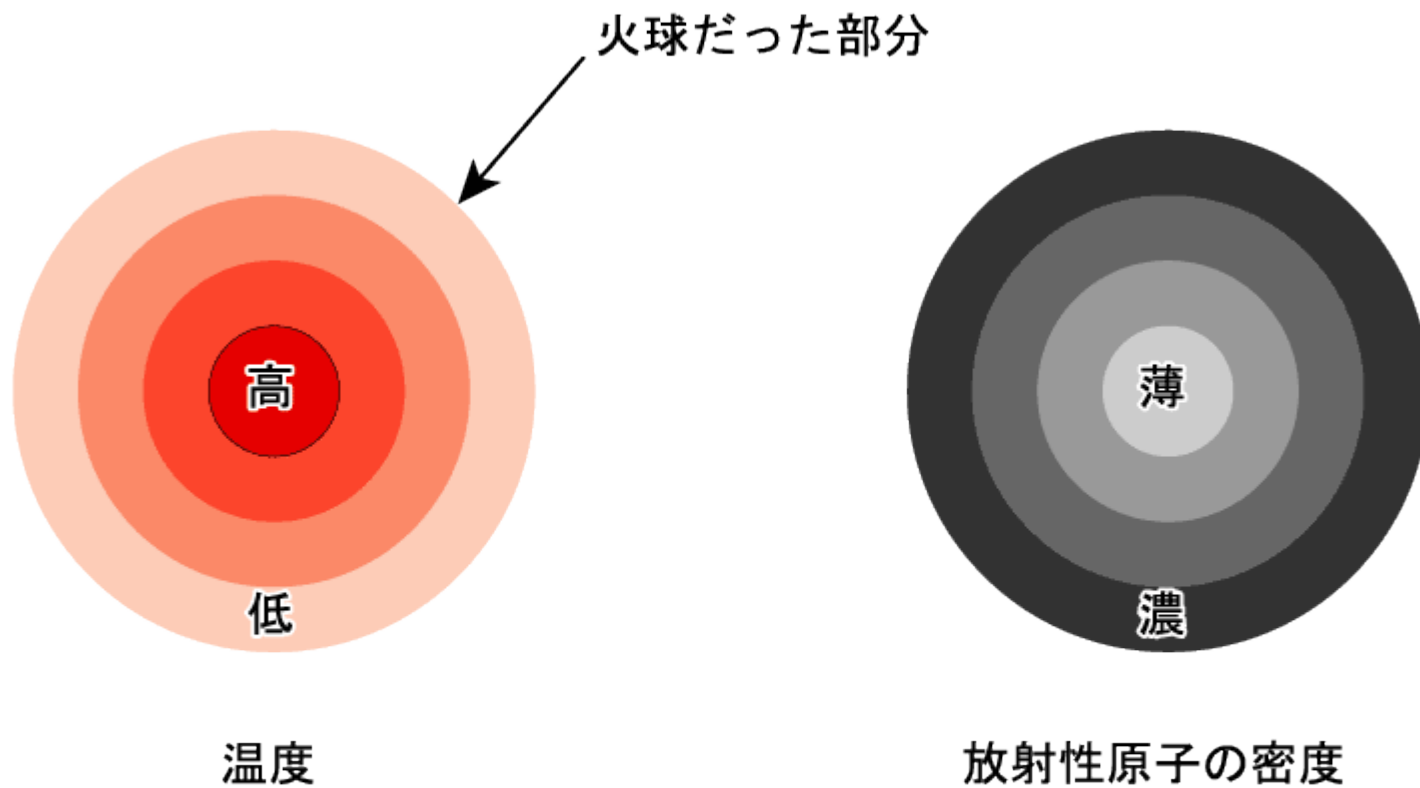
空

気と混合



分子速度

火球温度分布と放射性微粒子密度



原子の密度は、温度が低いほど濃い。

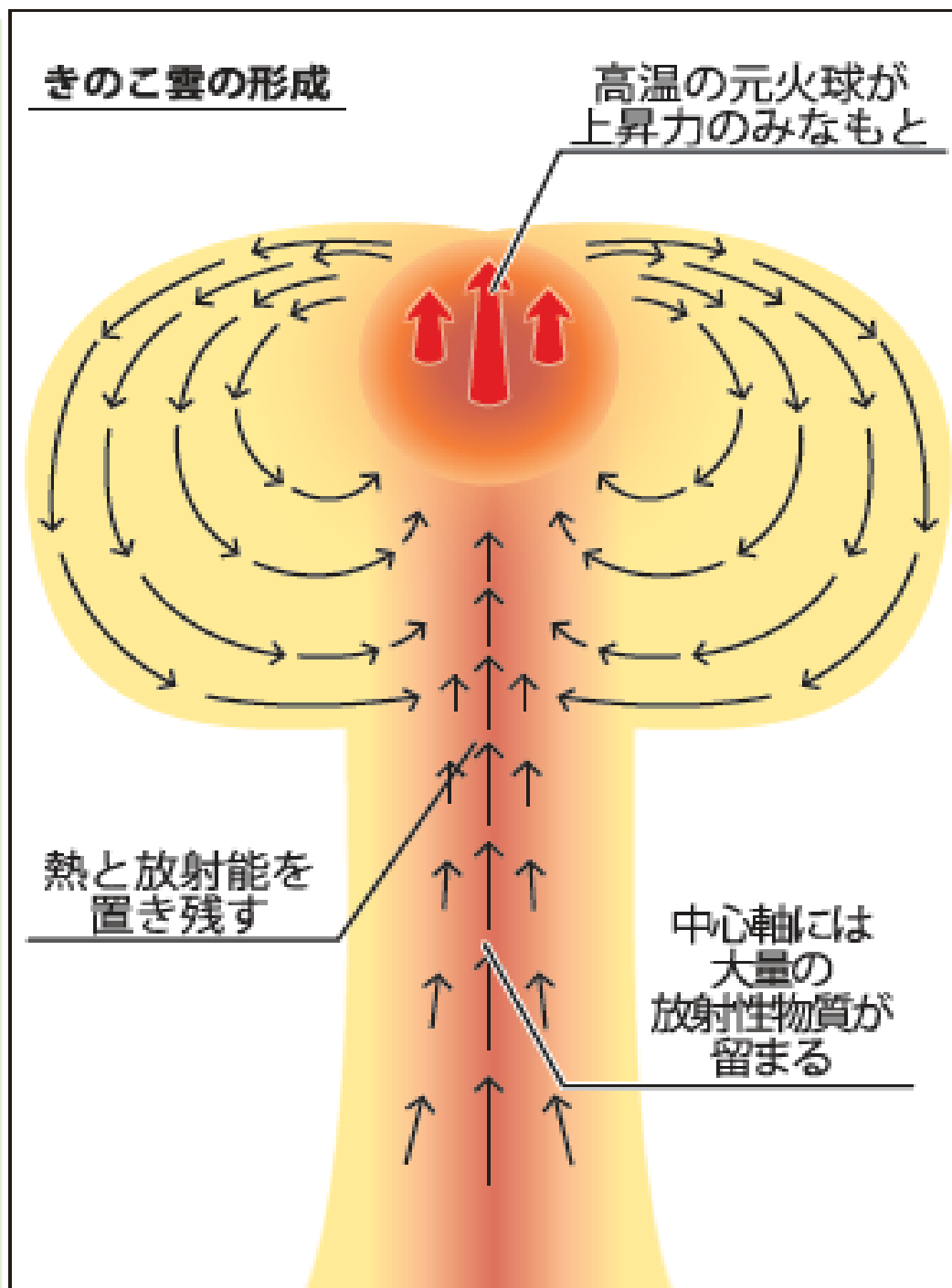
高温気塊の浮力
運動の大元

+

爆心地
地表の高温化
(4000°C)



- ①上昇
- ②トロイド
- ③中心軸形成



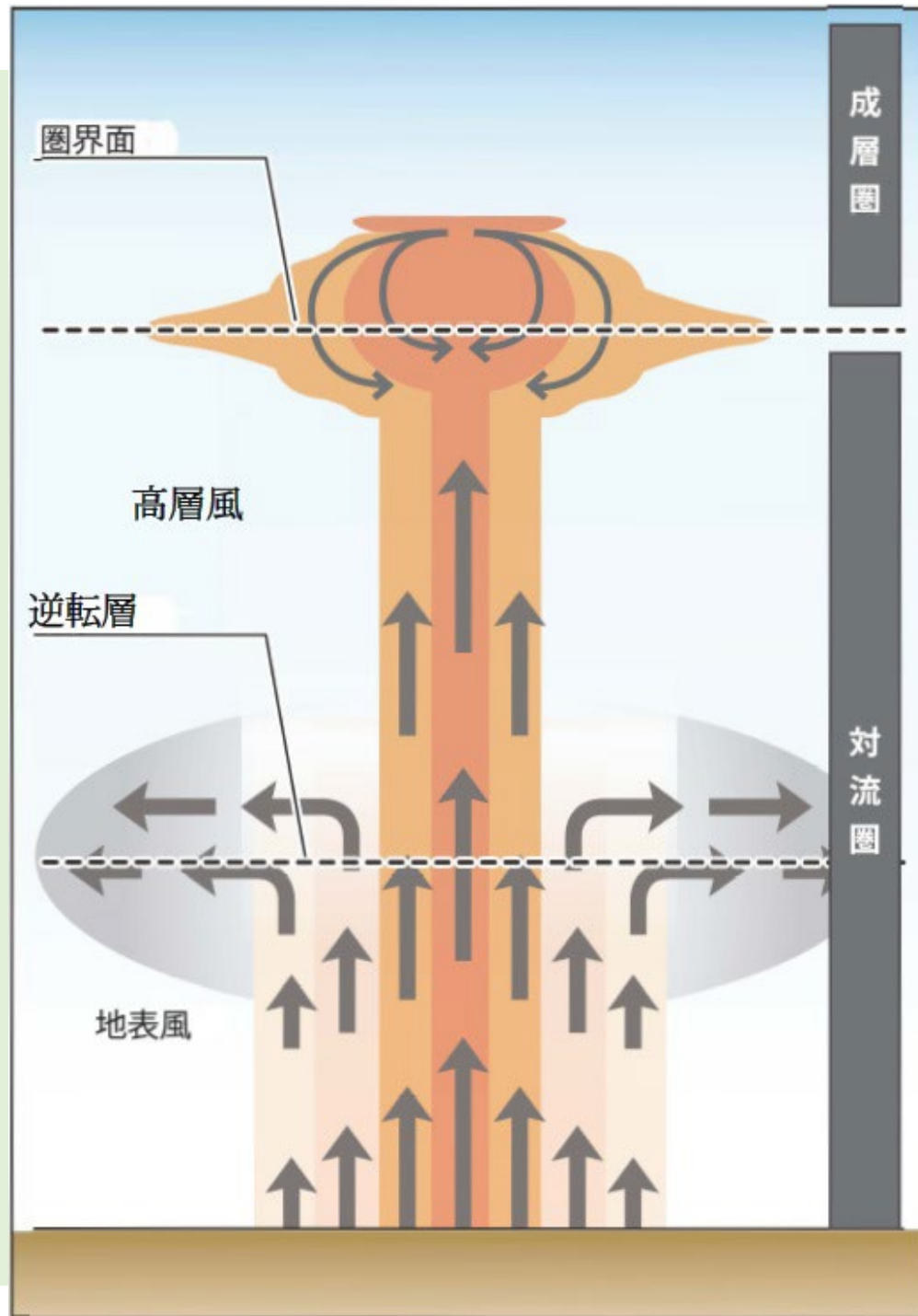
二重の 水平原子雲

① 逆転層

中心軸の外側が上昇
できなくなり、水平
に広がる

② 圏界面

対流圏と成層圏の
境界



放射性微粒子の拡散

① 水平に広がる原子雲半径12km
(逆転層・等方的)

② きのこ軸から拡散

③ 頭部から
成層圏・偏西風・季節風拡散
日本中・世界中

衝撃波の反射波がきのこ雲を作った？

Glasstone ⇒ とんでもない

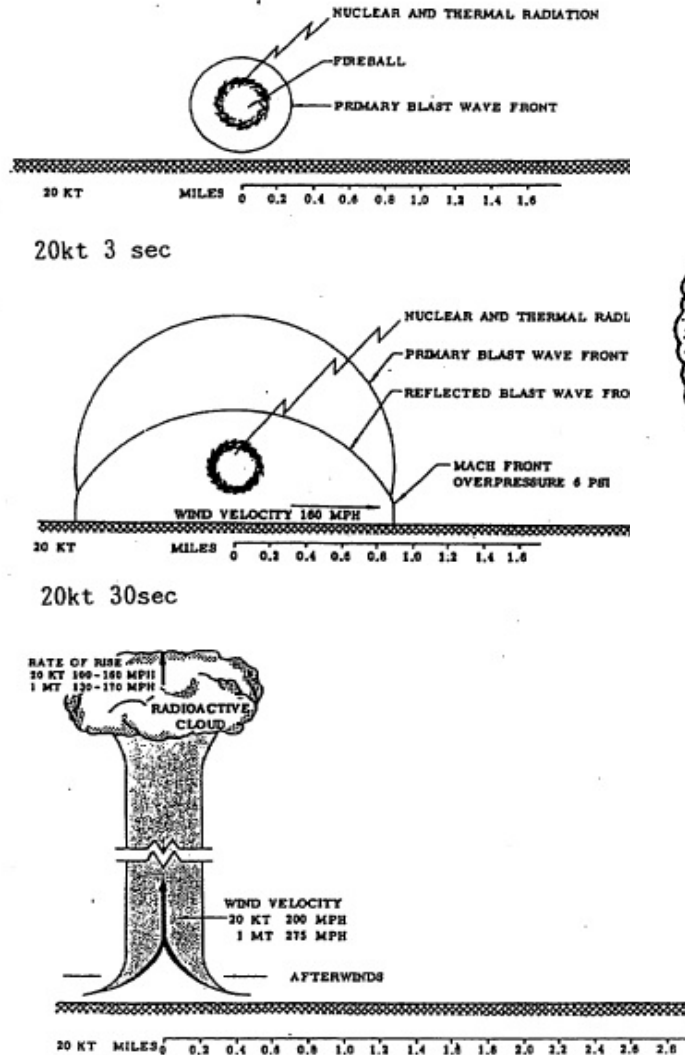


図1. 原子雲及び衝撃塵形成の説明図.

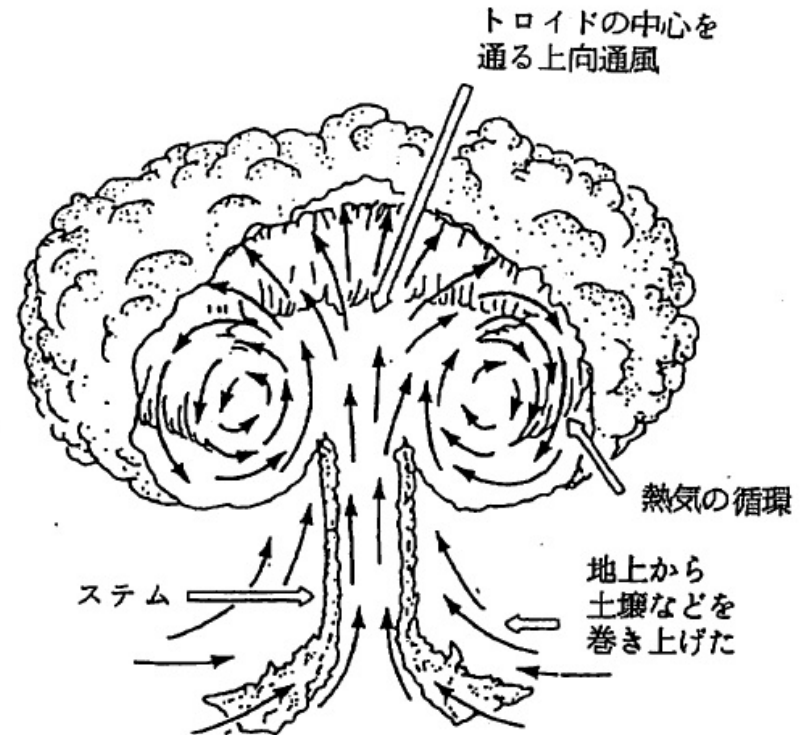
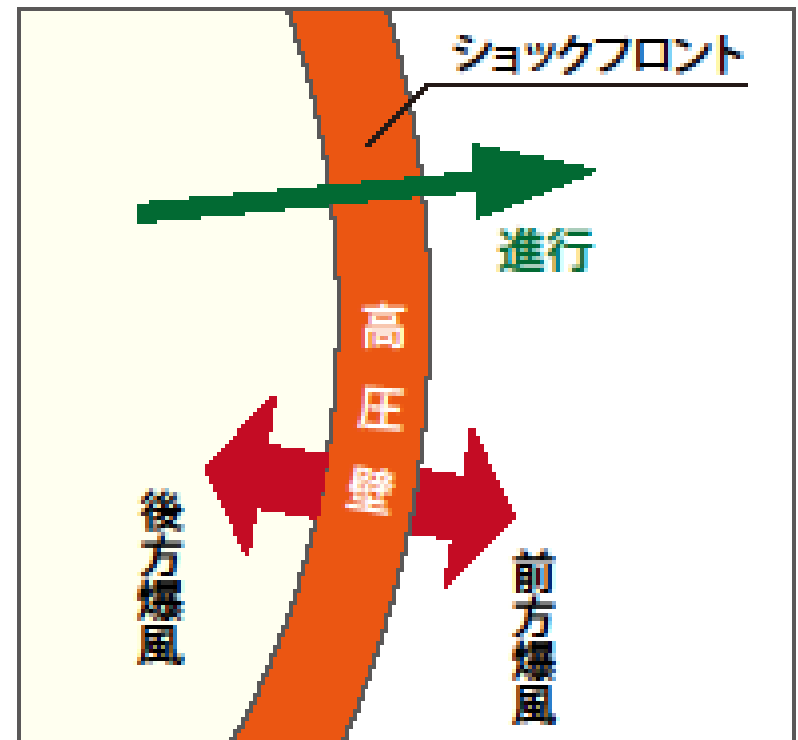
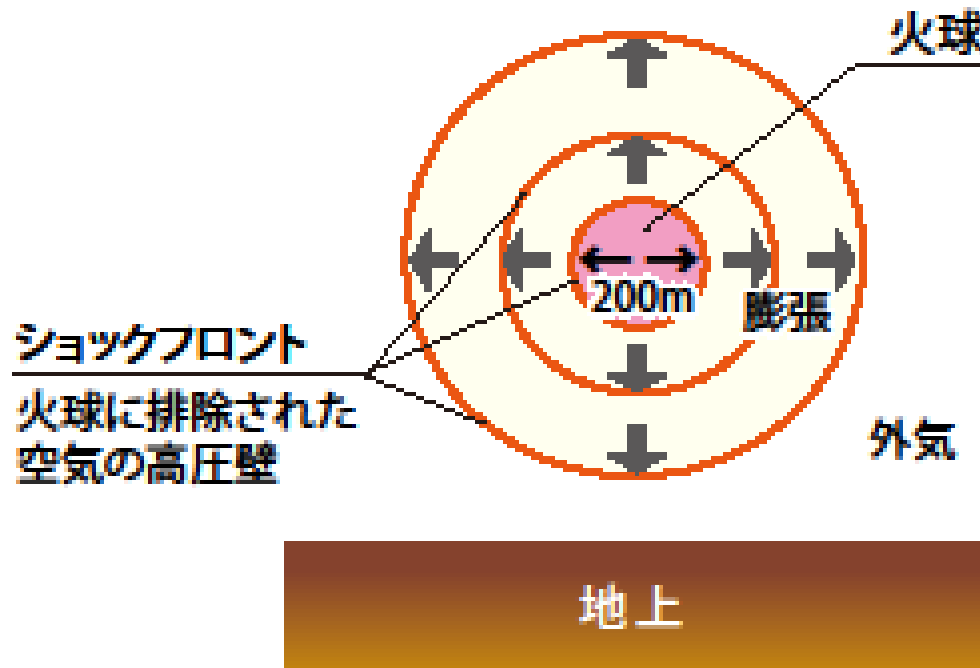


図2 原子雲成長過程

火球の膨張

⇒空気を追いやる⇒空気がフロントに集中⇒高圧壁
放射能満載 (火球と接触)

⇒ショックフロント 衝撃波

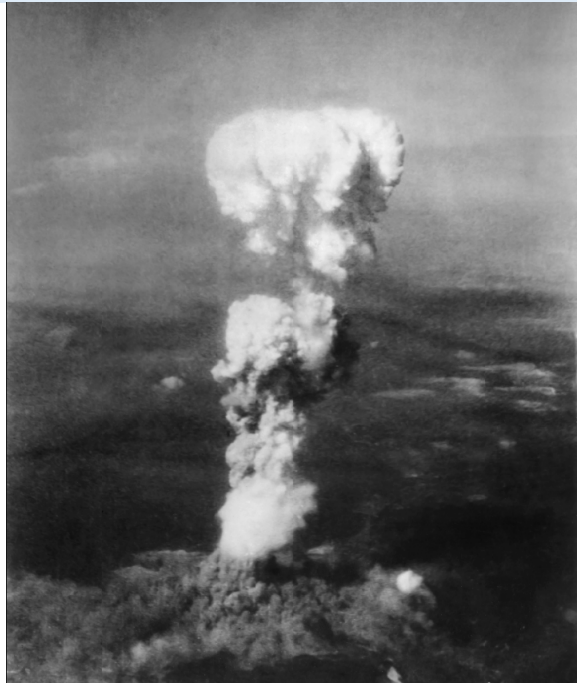


衝撃波の反射波

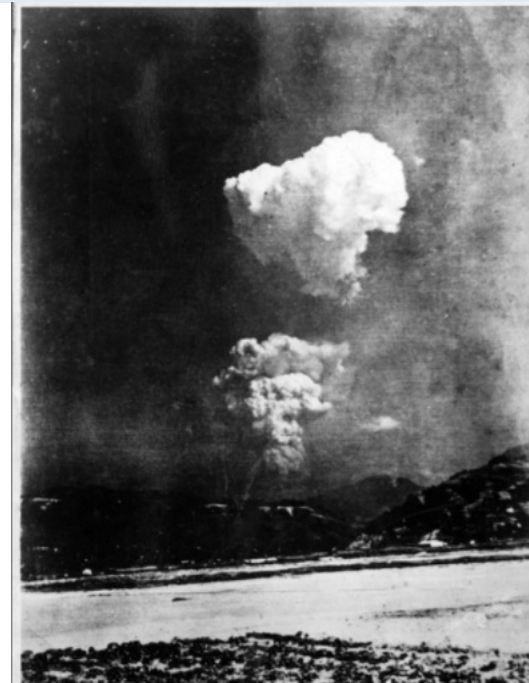
火球までの往復 3秒⇒

きのこ雲の傘を移動させた

× 針のように細くなって原子雲を貫く

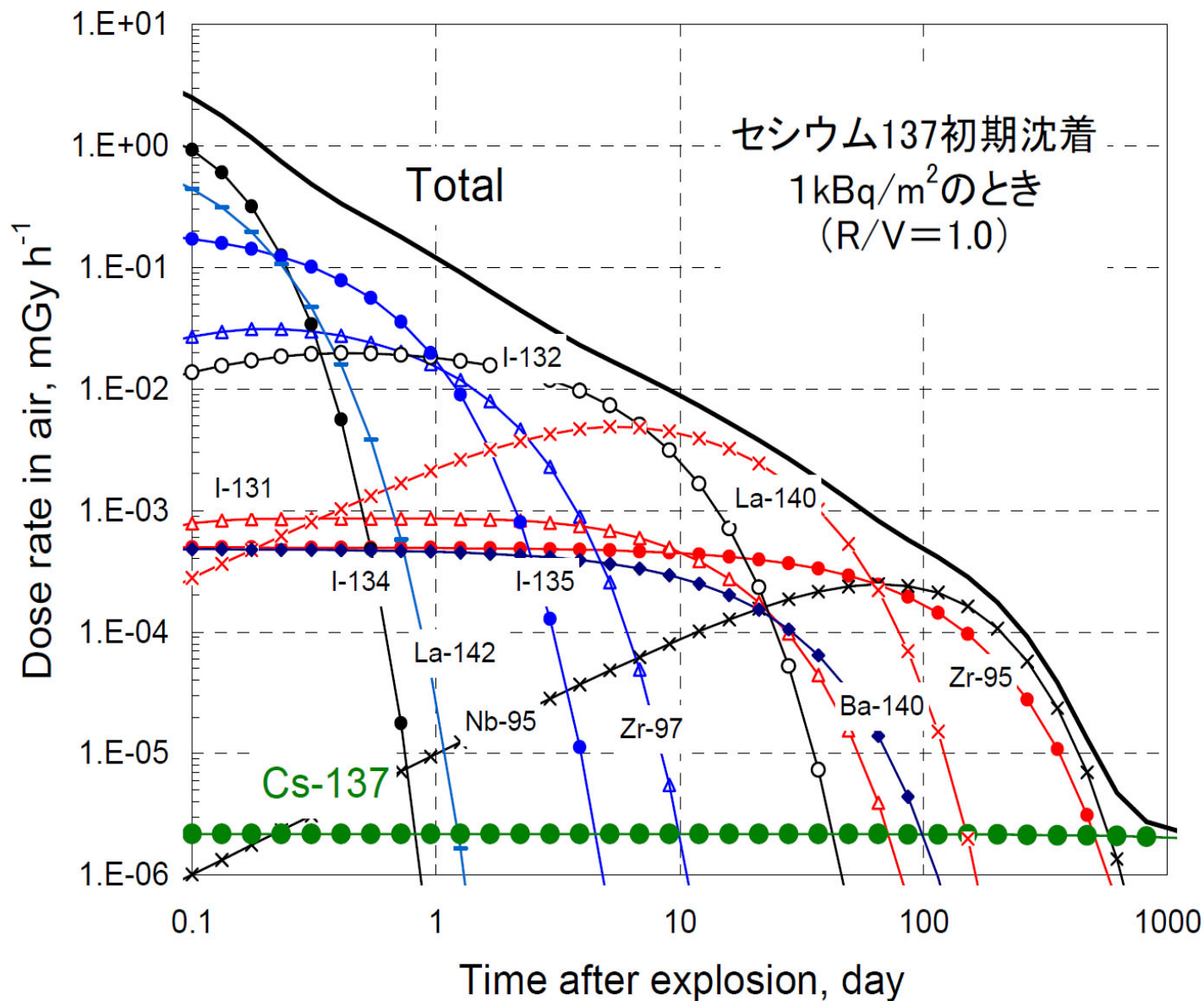


投下直後



約3秒後

黒い雨原子雲空間放射能はCS137の100万倍 雨に打たれても打たれなくとも猛烈に被曝した



長崎原子雲は
風上/風下での記録が残る
⇒移動に付いては判定記録無し。

地上風 西風
上空風 西風

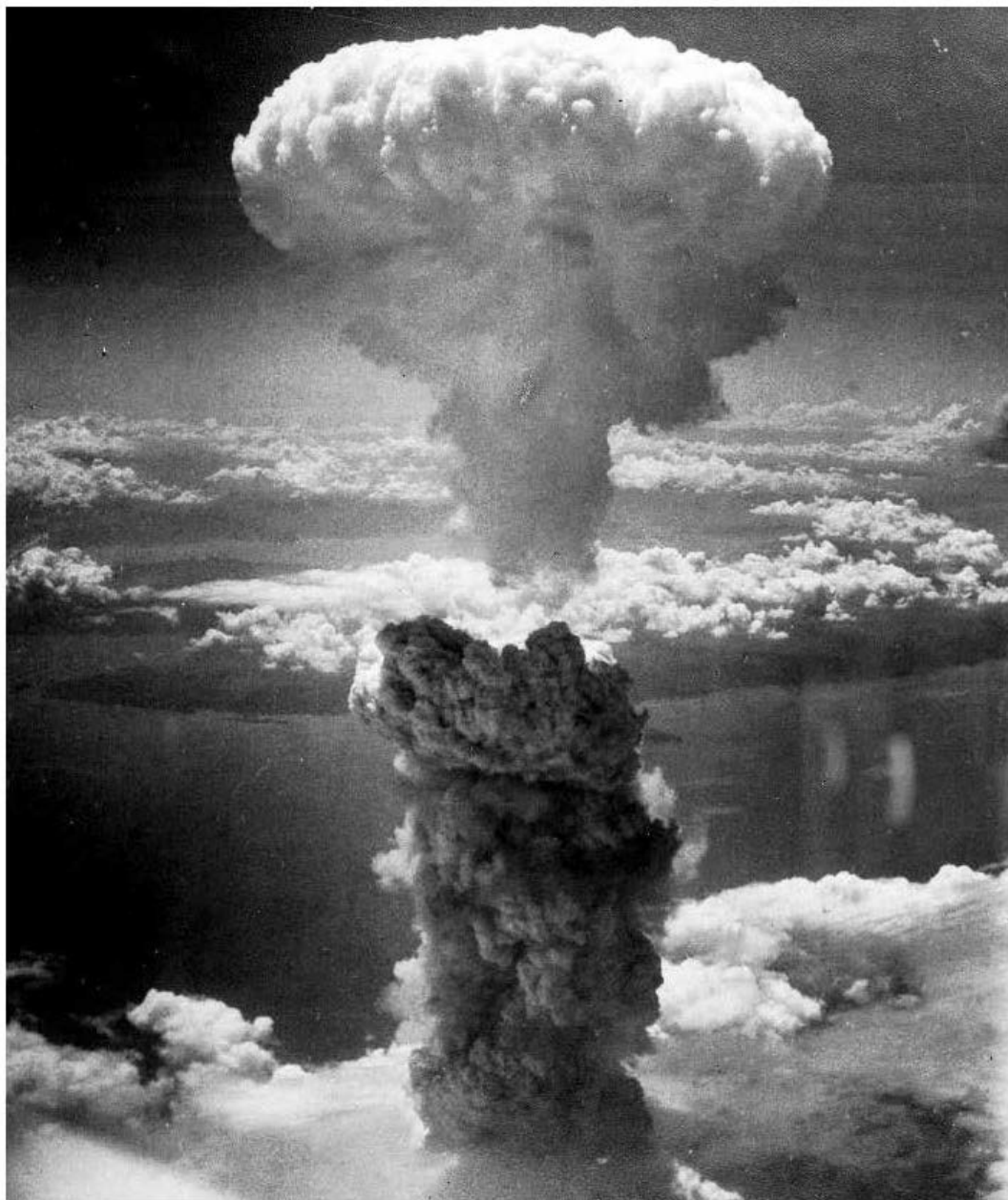
地上風による原子雲の移動は画面で確認出来ない
投下後 約2分 米軍機から撮影写真
 約14分 香焼島 写真
 約40分 温泉岳測候所でのスケッチ

長崎 原子雲

Charls Levy撮影
Great Artisteから

北西方向から

投下後
～2分後(推定)



← 逆転層

長崎原子雲

香焼町から

投下後15分



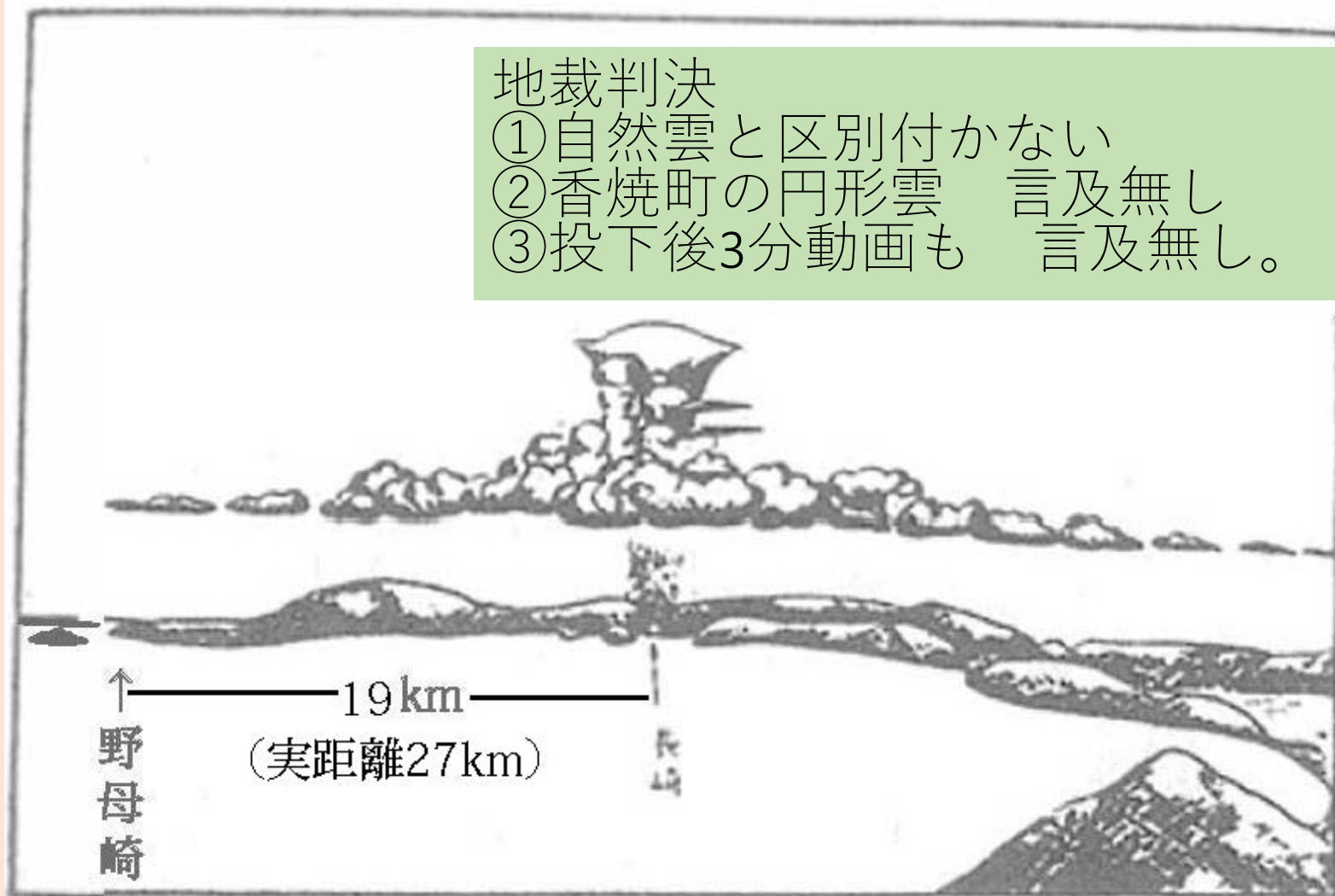
長崎
原子
雲

温泉
岳測
候所
から

投下後
40分

地裁判決

- ①自然雲と区別付かない
- ②香焼町の円形雲 言及無し
- ③投下後3分動画も 言及無し。



(a) 8月9日 11時40分

温泉岳から投下後 40分 水平に広がる原子雲

- (1) 逆転層に形成
 (厚い円形雲) 半径約 1 2 k m
 (薄く広がった部分) 半径約 1 9 k m
- (2) 地表風 西風
 高層風 西風

西風に乗って、東方向に流れる
⇒東方向の放射の強度著しい
⇒島原半島まで

野母崎実距離 27km \leftrightarrow 視角距離 19km

薄い原子雲半径 19km
厚い原子雲半径 12km

温泉岳測候所↓

実距離
27 k m

←視角距離
19 k m



何故 長崎では黒い雨が少なかったか？

長崎広島の気象記録								露点高度
時刻		6:00	8:30	9:30	11:00	12:00	14:00	0.976℃／100m
長崎 11；05投下	気温（℃）	23.1				29.4	29.9	666m
	湿度（％）	90				68	65	
	日照時数(ジョルダン)	0.00 曇り			0.69 雲あり	1.00 快晴	1.00 快晴	
広島 8:15投下	気温（℃）		27					359m
	湿度（％）		81					
	日照目視		雲あり	雲(～50%)				

原爆が投下～1時間程度後/雨が降り出す

広島：気温27℃、湿度81%

雲の占める割合はかなり有り、

黒い雨が降り出す1時間後：ほぼ50%程 雲で覆われる

長崎：気温28～29℃、湿度～68% (推定)

日照時数は0.69だったものが、約1時間後には1.0

気温29.5℃、湿度68%で、快晴となっていた。

長崎の方が気温が高く、湿度が低いことが
「黒い雨」降雨が少ない条件となった。

被爆体験者訴訟法廷の対応 第1陣

矢ヶ崎克馬の法廷証言が阻止された

(1) 国側が

「矢ヶ崎に対する反対尋問はしません」

(2) 裁判官が

「反対尋問を欠く証言は証拠にならない」

判決原告は自力で証拠を説明せよ

一部勝訴

理由書

矢ヶ崎意見書が有ったことさえ書いていない

第1陣高裁

「典型的に司法の「権威」を裁判官自らが投げ捨てている」と
判断するのは、上記の

「矢ヶ崎意見の基調をなすのは、徹底した反 I C R P の姿勢である」
と判決文に明文化したことです。

広島原子雲は
風向きの直角方向 記録が残る
⇒大幅移動

地上風による原子雲の移動は約9km（1時間で）

投下後 約1時間後

円形に広がる原子雲は長いこと無視されてきた
画面には明瞭に記録されている

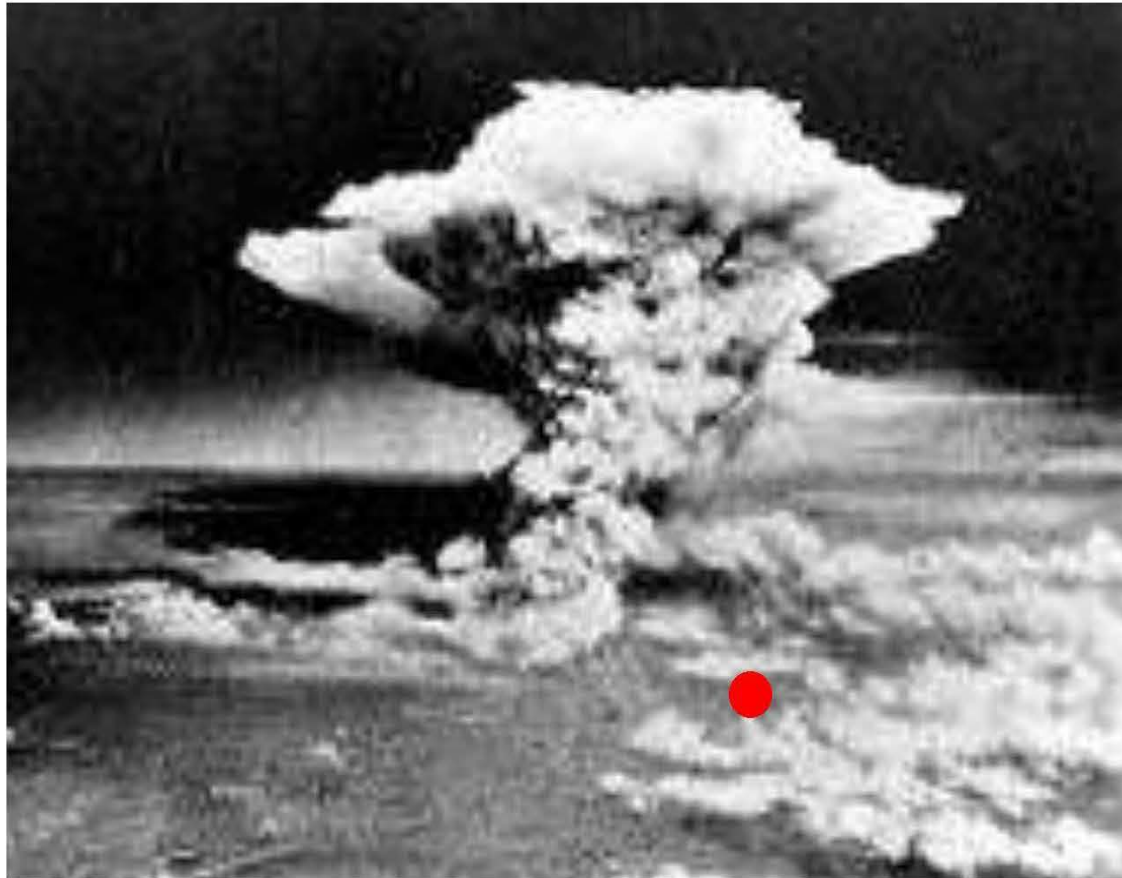
広島原子雲

火球内の放射性物質を直径30kmにまで
運んだのは**水平に広がる円形原子雲**

水平に広がる
円形原子雲



キノコ雲頭部の
陰を映している



⇐ 圏界面

⇐ 逆転層

← ● 爆心地

原爆被爆地域図

マンハッタン調査団
地裁判決 X
精度が劣り誤差が大

- ① 台風後の測定 ⇒ 残留放射能の十分な証拠
- ② 測定記録：バックグラウンドを差し引いた値
- ③ バックグラウンドは自然の5倍 ⇒ 測定値は過小評価
 $0.01 \text{ mR/h} = 0.087 \mu\text{Gy/h}$
- ④ 装置の信頼性 ⇔ 等高線が結べる ⇒ 精度十分良い
- ⑤ 原爆放射能を証明する
信頼性は十分ある

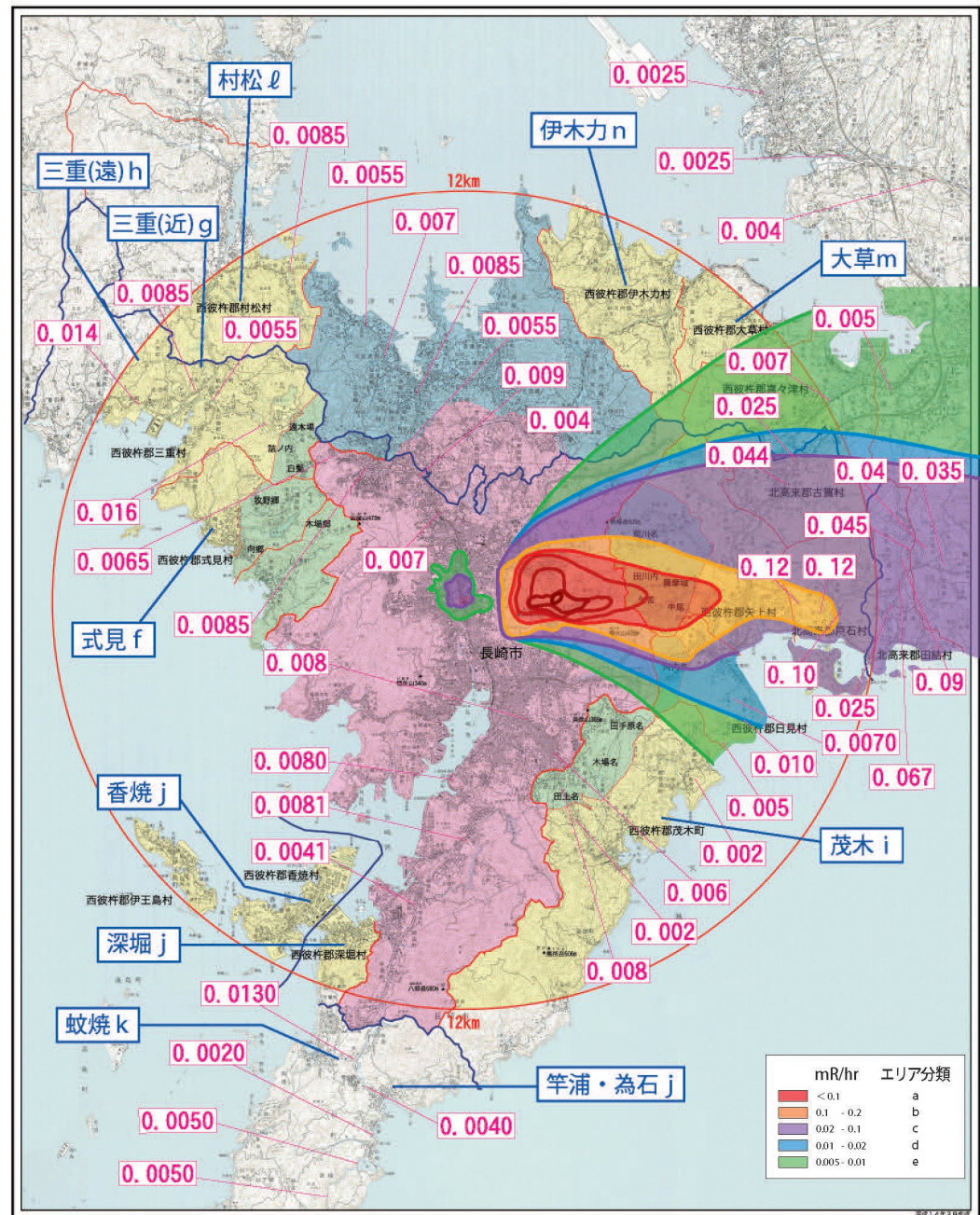
なお、昭和51年放射能測定
(日本公衆衛生協会)の測定結果

(土壌中の ^{137}Cs)は

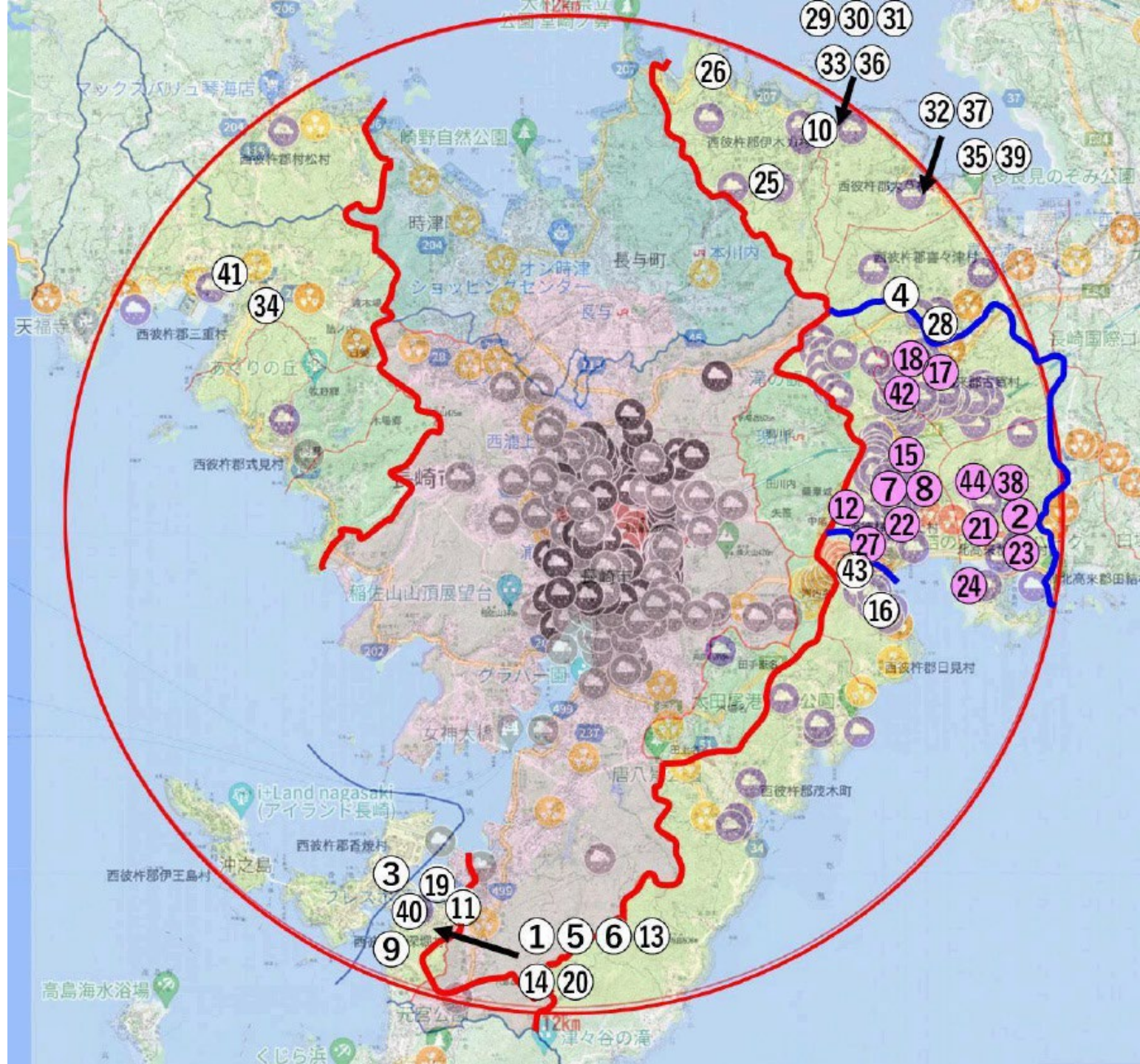
平均値を比較すると、

長崎の測定結果は広島2.22倍

であった (甲A112)



被爆 体験者 の 分断

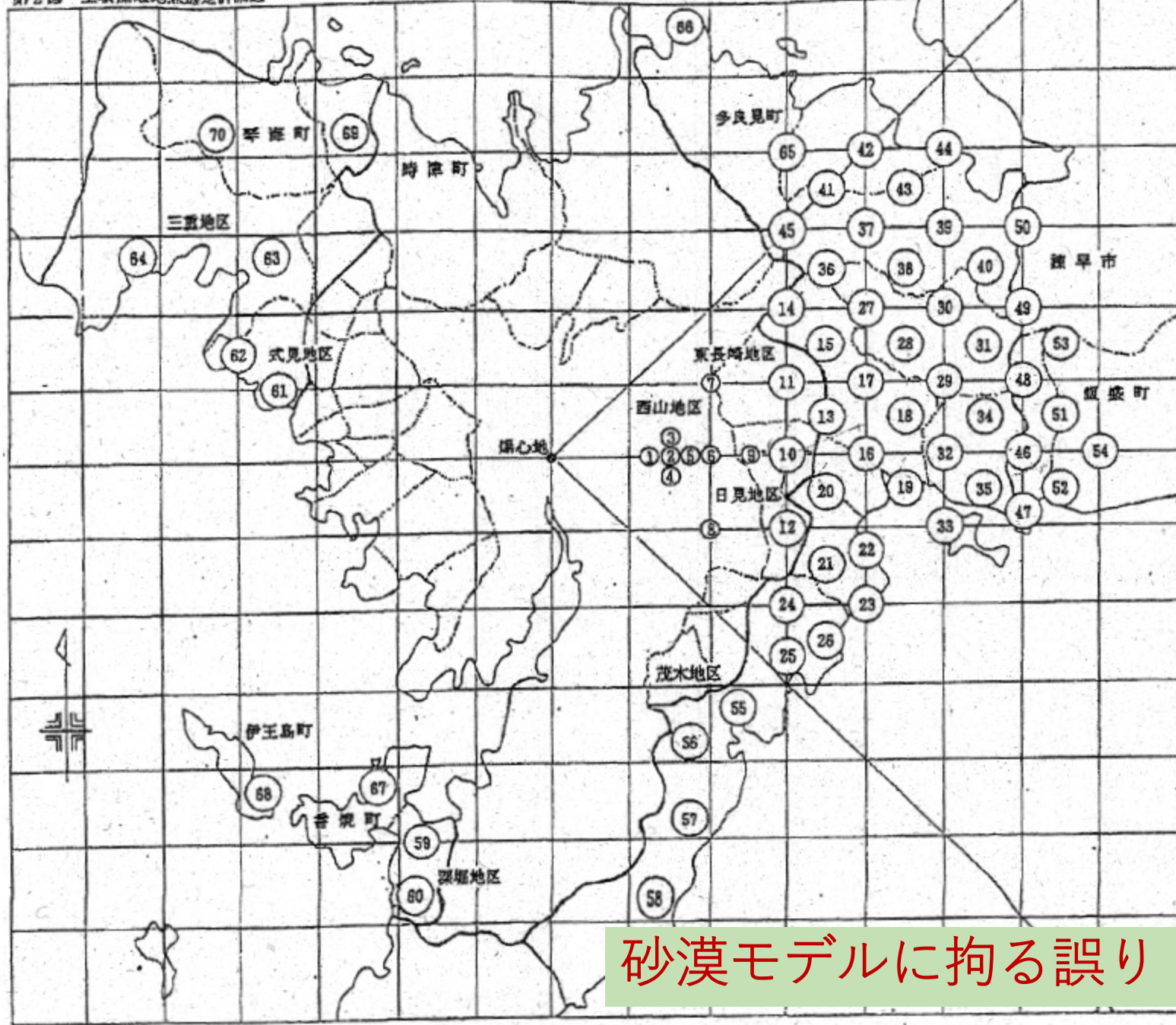


プルトニウム測定

残念ながら

砂漠モデルに基づく測定計画しかなかった。

爆心地周辺の全面的網羅的測定無し



プルト
ニウム
測定

爆心地
東地区
以外は
測定地
域では
ない

参照と
して測
定（探
索目的
ではない）

砂漠モデルに拘る誤り

被爆被害者の記述は 「黒い雨の証拠にならない」のか？

専門家や厚労省は
科学の誠実さと人道の心を失っている！

「被爆体験者」を巡り、厚生労働省は当時の被爆体験記を調べた結果を公表した。

国立長崎原爆死没者追悼平和記念館資料から、被爆地外3744件を抽出し、**雨に関する記述41件**、飛散物に関する記述が159件。統計学や放射線疫学などの専門家3人に評価を求めた

「思いを記述したもので、降雨などを明らかにするデータとしては信頼性に乏しい」「天候の記述を網羅的に確認せず調査として不十分」「体験から執筆までに記憶が修飾された可能性がある」

厚労省は「降雨などを客観的事実として捉えることができない」と結論づけた(JIJI.COM、**2024/7/8**)。

雨域などの指定が困難だというのは違い、

「降雨」自体を否定しているのだ。

東電原発事故 行政や医療は どのように市民を守ったか？

行政

法律（1mSv/年）を守らず **20mSv/年**

高汚染地帯に住民を住み続けさせた⇒**防護対策せず**

法律（原子力災害特措法）を守らず

合同対策協議会を設置せず **私的機関をたち上げた**

原災避難訓練で実施していた**甲状腺がん防止対策**

安定ヨウ素剤を配布しなかった **（根本に被災者の防護無し）**

食べて応援 で **内部被曝を強制した** **（根本に被災者の防護無し）**

100Bq/kg 以下は安全、100mSv以下は安全

風評被害払拭⇒**食料選択の自由を否定した** **（根本に被災者の防護無し）**

医療

放射能被曝による健康災害を否定

笑っていれば放射能は・・

甲状腺がんセカンドオピニオンは遠慮するように

「被曝防護指針」無し⇒ 診療現場で市民を守らなかった

多くの病院で病院食に「福島米」を指定 **内部被曝防護の認識無し**

患者に毒を盛る 行為 **（根本に被災者の防護無し）**

科学と人権に立脚する 被曝評価体系を！ ICRP批判

(1) 実効線量の科学体系破壊

(2) 健康被害の過小評価メカニズム
電離対象をDNAに限定
活性酸素症候群無視、

(3) 健康防護から国家統治基準へ
IAEA もはや人権に基づく防護はしない
ICRP2007勧告